

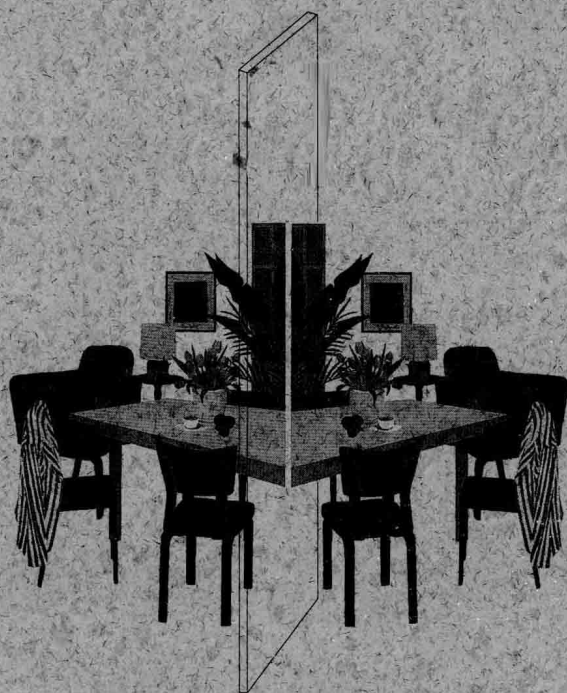
顔のない 肖像画

連城三紀彦



肖像のない顔

彦紀三城連



顔のない肖像画

一九九三年七月三十日 初版発行

著者 連城三紀彦

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(三五六二)二〇五一(編集)

〇三(三五三五)四四四一(販売)

振替 東京一―三二六―一〇四

支局 大阪市北区曽根崎二―十二―七

TEL 〇六(三一二二)一五七三

印刷 大日本印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

ISBN4-408-53200-2

© M.RENJŌ 1993
Printed in Japan

目次

瀆^{けが}された目

5

美しい針

33

路上の闇

57

ぼくを見つけて

83

夜のもうひとつの顔

109

孤独な関係

133

顔のない肖像画

171

カ
バ
ー
イ
ラ
ス
ト
／
井
筒
啓
之
装
幀
／
道
信
勝
彦

顔のない肖像画

瀆^{けが}された目

そうです。窓にカーテンをひいた時からおかしいとは思ったんです。私は「あつカーテンそのままにしておいて下さい」って言ったのですから。病室にひとりしていると楽しみなんて何もなくて、その時刻ごろはぼんやり窓から外見てるんです。この六階の窓からは向かいの棟の屋上が見えますが、そこに鳩が来るので、その時も恰度、真つ白な鳩と烏みために黒い鳩らが羽を絡ませていて、あの二羽は仲良く遊んでるのか、争ってるのかって、そんなことぼんやり考えてました。ええ確かに四時を十分か十五分過ぎた時刻のことです。先生には私の声が聞こえなかったように思えました。そのままドアの把手に手をかけ出ていってしまふ氣配でしたから、私はベッドの上に起きあがり、自分の足で窓辺まで歩いていこうと思ったわけです。

片足を何とか床におろし、スリッパを足の指で掏ったところで、やっと先生の目に気づきました。先生は出ていこうとしたのではなく、背中であらゆるドアをしつかりと押えつけて立ち後ろ手に把手を握りしめ、内側から施錠したのです。錠のおりる冷やかな金属音は、眼鏡の裏に隠れた灰色の瞳の奥から響いてくるようでした。冷たい視線が、その音とともに、感情の全部に錠をおろし、白衣をまとった体が血の通わない無機質な物体へと閉ざされていく氣がしました。前から優しい、いい方だとは思ってましたが、その目だけは好きになれませんでした。見つめられると顕微鏡で覗かれているように私の胸の中の一層深い裏までが露にされるような恐ろしさがありました。ええ、そうして最初に私を姦したのがその目でした――。

不恰好な姿勢をとったために、寝着がはだけ覗いてしまった腿を、その目はじっと見ていました。はい、正確に言えば右の太腿です。注射針よりも鋭い痛みを私はそこに感じていました。そんな、わざと太腿を見せたなんて事は絶対にありません。私は去年骨折事故を起こし、その骨折が癒った後も右脚が麻痺して長い間動けませんでした。先生の治療のお蔭で最近やっと少しずつ

歩けるようになり退院も間近にはなっていたのですが、それでも床に足をおろすのにもまだ相当な力が要るのです。寝着の裾が乱れるのに構っている余裕などありませんでした。ええ、見られてるとわかって即座に裾を直さなかったのは、確かに私の手落ちです。でもあの時は咄嗟（とっさ）のこと、何故カーテンやドアが閉ざされたかわからないまま、私はまだそこに立っている人を医師だと思っていたのです。それまでの一年間、先生と私は医師と患者という関係だけで繋がっていました。医師は患者の体など、人体の模型のようにしか見えないものでしょう。患者としてならそれまでも私は二、三度先生に体の全部を見られています。それが一年経って突然、その目が別の意味を帯びて私を見つめたからといって、私には何も理解することなどできなかったのです。

私は意味もなく微笑しました。何か恐ろしいことが起ころうとしていることを、意識がまだ確認しない前に本能が感じとり、その不安をごまかそうとしたのだと思います。先生は、私が自分から誘うように微笑したのだと言っているようですが、そんなことは真つ赤な嘘です。密室内での出来事なのでどんな嘘でも通ると考えているに違いありませんが、そもそも錠をおろし部屋を密室にしたのは先生の方なのですから、それだけでも私の方から誘惑したのでないことはわかってもらえるはずです。

先生は近寄ると床にぶらさがって揺れている私の脚をそつともちあげ、ベッドの上に戻しました。スリッパを求めて振り子のように揺れていた脚が静止したかわりに、今度は胸に震動が起こつて、動悸（ドキ）の音が不安へとつながっていくのがはつきりとわかりました。腿に蟻が這うような感触を覚えましたが、それが先生の指だとわかるまでに数秒を要しました。今までも診察で何度も同じことをされています。麻痺していた右脚に知覚が戻っているかどうかを指で押えたりさすったりするのが先生の役割でしたから。先生の治療のお蔭で私の脚は、その時の指の動きがいつも

より繊細で柔らかいとわかるほどにまで回復していました。その柔らかさを理性で必死に否定しながら、私はまだ、これはただの診察なのだと自分に言い聞かせていました。何も抵抗しなかったのはそのためです。その段階まで、先生の行動で具体的に不自然と指摘できるのは、カーテンとドアを閉じたことだけです。錠をおろしたことぐらい、どんな風にも意味づけできるではないか、そう考え私はまだ先生を信じることを選ぶうとしていたのです。一年間抱き続けていた信頼は、錠のおりる音ぐらいで覆せるものではありません。それに事件というのは、いつもはつきりとした足音で近づいてくるとは限らないものです。眠りの中で聞くような実感のない足音でいつの間にか背後に忍び寄ってきて、ふり返った時はもう手遅れなのです。

枕元のブザーが床へと払い落とされ、口の中にタオルを押しこまれ、私がやつと何が起ころうとしているのか具体的な言葉で理解した時も、もう遅すぎたのです。いいえ、正確に言うところ、まず寝着の紐をはずし、それで手を縛りあげ、私の上半身の自由を奪ってから、周囲を見回しタオルを見つけて私の口へタオルを押しこんだのです。その時確かに胸が二、三度波うちました。しかし故意にそうしたのではなく、喉もとに這いあがってきた吐き気が出口を失い胸へと凄まじい勢いで逆流したのです。吐き気は口にタオルを押しこまれたせいより、これから起ころうとしていることへの嫌悪感のせいの方が大きかったと思います。

ええ、最初に事情聴取した刑事さんからも抵抗できなかったのかと尋ねられましたが、私にどんな抵抗ができたでしょうか。ゆっくりとなら歩けるようになっていたとは言っても、私の右脚は普通の人の半分のもつていないのです。先生は決して大柄ではありませんが、大男に襲われた子供のようなものでした。その上、いつの間にかベッドにのぼった先生は両脚でしっかりと私の下半身を挟みこんでいました。私の体はその脚と、まだ完全には癒^{なま}っていない麻痺と、恐

怖とに釘うたれ、ベッドの狭い空間に固定されていたのです。自由になったのは目だけでした。私は、その目を大きく見開き、視線だけを叫び声にして必死に訴えました。

でも先生は無言でした。私を見おろす目は冷やかで、欲望を何枚ものレンズの裏に隠しているように見え、私はまた先生は顕微鏡を覗いているのだと思いました。そして今度こそその目は、私の気持ちの最も恥かしい部分を覗きこみ、私の体の奥底の、深い闇に護られていた芯までを暴いてしまおうと——先生の指は白衣の裾のボタンを一つずつ外しました。あくまで冷静さを保ち、まるで死人を相手にしているみたいでした。レンズの焦点が重なり、視線の冷たさも鋭さも錐のように太くなり、私はその鋭器で刺され、本当に少しづつ死んでいくような気さえしました。先生は次にベルトをはずし、私は白衣の割れ目の裏に蠢いているものから少しでも視線を遠ざけるために顔をのけぞらしました。先生の手が寝着の襟を両側から引っ張り、胸が露になり空中へ投げだされたような気がしました。胸の谷底を熱い雫を落しながら焼けつくような条をひいて、下方へとすべり落ちていくものがありました。私にできた抵抗は、先生の体から少しでも遠く離れたものを見るために、首をさらに弓なりに反らせ、頭をさらに深くベッドへと喰いこませることで済みました。

ベッドの柵のむこうに、花瓶が逆さになって見えました。私はせめて何か他のことを考えたいと思って、忘れてしまったその花の名前を思い出そうとしました。花は一本一本が別の色で、赤や青や黄の鮮やかな原色は、白い、白すぎる壁を背に乾いて造花のように見えました。震動が伝わり花が本当に揺れたのか、それとも私の目が波うつて揺いだだけなのかはわかりませんでした。その後具体的にどこをどうされたかは覚えていません。感じていたのは痛みと屈辱感と……恐怖だけです。フリージア、ルピナス、サフラン、シオン……、知っている花の名を次々に胸の

中で叫び続けました。そのうちに花は嵐に巻きこまれたように大きく揺らぎ、花の色がぶつかりあい、一色の白に溶けこみ、その後光が炸裂するような凄まじい空白がきました……。

我にかえった時、病室にはもう誰もいませんでした。暮色がせまり灰色の闇が壁を塗りかえたその部屋には、私さえもがいなかった。少なくとも今までと同じ私は、もうそこにはいなかったのです。岸にうちあげられた漂流死体のように露にされた肌を見知らぬ匂いに濡らし、ベッドの上に横たわって、私は先生が部屋を出ていく時呟いた「誰にも言わない方がいい。言ってもこういう事には確かな証拠がないから、私が知らないと言ひ張ればどうにもならないのだ」という言葉を、遠ざかった波のざわめきのように耳に響かせていました。今日まで二十八年の自分が砂でできた人形にすぎなかったように思えました。突然、白衣を脱ぎその下に隠していた獣身をむきだしにした一人の男の手で、崩され、廃されたのです。私は自分の体が人間の体であることを確かめるために、手で首すじを、胸を、脚を触ってみました。

ちようどそこに食事係の島村さんが夕飯の用意をもつて入ってきたのです。ノックは聞こえませんでした。茫然としていたので、たぶん聞き落としたのだと思います。咄嗟のことでしたから何の考えもなく反射的に寝着の襟を合わせ、裾を直し、「暑かったから……」と弁解にもならないことを口にしました。島村さんは恥かしいものでも見たように目をそらせ、食事をベッドの傍におくと、逃げるように部屋を出ていきました。いつもは気さくな人なのに、顔を硬ばらせ、私と口をきくのも汚らしいというように唇を固く結んでいました。島村さんは、その時私が手で全身を撫でまわしながら、首をのけぞらせ、恍惚とした目で天井の薄闇を見ていたと証言したそうですが、それは誤解以外の何ものでもありません。微笑していたのは事実です。それは否定しません。でも一瞬のうちに何もかも失ってしまった人間って、絶望の底で微笑したりするもので

はありませんか。体は虚^{から}っぽで、私は自分が誰かもわからず、怒りとか悲しみとか人間らしい感情の内部を忘れていたのですから――。

やっと人並な怒りが胸に突きあげてきたのは翌日、また先生が診察に来て、いつもと変らぬ顔で五、六分私の脚を調べ、出ていった後でした。看護婦の小沢典子さんが一緒でしたから、先生としても前日のことには触れるわけにはいかなかったでしょうが、何喰わぬ無表情はそれだけの理由ではなかったようです。しみ一つない眩^{まよ}しいほどの白衣を見てみると、前日の出来事に先生が何一つ罪悪感を残していないことがよくわかりました。それは、はっきりと一つの犯罪です。しかし潔癖な白さを誇る白衣の鎧^{よろい}にその罪を包みこみ、今後先生は皆から、医師としての尊敬を受けながら生きていくのです。罪悪感など、先生がその瞬間に感じたはずの快楽とともに、私の体を離れた時にはもう消え果てていたでしょう。それに比べ、私の方はもしかしたら一生、忌^いわしい記憶と男への不信感をひきずって生きていかなければならないかも知れないのです。いいえ男への不信感だけでなく、医師という聖職への信頼は粉々に砕け、もう破片さえ見つからないほどです。事実、私の右脚はあの時から再び動かなくなりました。私の脚が少しでも動くようになったのは先生のお蔭ですが、その脚を再び奈落の底へ、今度こそ二度と這いあがれないような暗い穴の底へと突き落としたのも先生です。あの時感じた屈辱感は脚の中に硬まり、私の人生までも麻痺させているのです。

先生が出ていった後も白衣の眩しきは目の奥底までまっ白に焼き続け、私は夢中でブザーを押すと、やってきた看護婦さんに村木先生を呼んできてほしいと頼みました。しかし先生は忙しいという理由で夜まで待っても来てはくれず、次の日には別の先生が来て、村木先生は金沢の学会に旅立ったと教えられました。学会の話は事実ですが、私は先生が私を避けているのだと感

じました。いいえ避けているだけではなく、私を無視し、黙殺したのです。それまではまだ先生にわずかも罪悪感があり、心から詫びてくれるのなら、許してもいいという気がなかったわけではありませんが、結局、その夕方、正確に言えば事件から四十九時間が経って、見舞いに來た妹の雪子に全部を話し、警察に届け出てくれるよう頼んだのでした。

姉の静子から話を聞かされた時、私はあまりのことに驚きながらも、姉の言葉に嘘はないと思いました。姉はこんな事で嘘をつけるような人ではありません。それは二十何年か一緒に暮してきた私がいちばんよく知っていることです。それでも私は「こういう事は相手に白をきられたらお終いだ。裁判でも勝つとは限らない。被害者の方が今以上の辱しめを受ける結果にもなり兼ねない。争いになることは目に見えているが、戦い通すだけの覚悟はできているか」と聞いたのですが、姉は黙って大きく肯きました。姉がそうもはっきり自分の意志を見せたのは、それが初めてで、私は姉が受けた精神的打撃の大きさを改めて感じないわけにはいきませんでした。子供の頃から私の方が確りしていて、よく姉さんの方が妹みたいだと言われてきました。姉はこの歳になっても幼いところがあり、純真で他人を簡単に信じてしまうのです。姉は今度のことを突然の出来ごとのように感じていますが、もう少し人を見る目が確かなら、それまでも村木修三の態度におかしな点が見えたはずですが、村木修三は姉のそういう人のいい所につけこんで、医師として、いいえ人間としてあるまじき行為をしたのですから、私には許すことはできません。

今のところ、結果は私の恐れていた通りです。村木だけでなく、病院側全員が結託したように姉を誹謗しているのですから。確かに姉は昨年事故で入院するまでクラブ勤めをしていましたし、精神的には男性に対して多少だらしないかもしれませんが、体の点では身もちの堅い所があ

り、以前も結婚寸前までいった男の人に婚前交渉を許さず、その事で相手の人が自分に愛情がないのだと誤解して婚約を解消されてしまったこともあるほどです。その姉が自分から医師を誘惑しようとしたなどあり得ないことです。しかも拒絶されると自分の手で自分を潰し、その姿を食事係の島村さんに見られたことと腹いせから、暴行されたと出鱈目を言い出したなど、姉の性格からは絶対に考えられないことです。村木修三の主張は全部作り事です。こんな事は言いたくありませんが、警察では本気で今度の事件を調べて下さっているのでしょうか。たとえば島村タエさんの証言がいい加減なものであることは、病室の構造をちよつと見ればわかることです。島村さんは、「フックをしても返事がないのでドアを開けると患者が首をのけぞらせ恍惚とした目を天井にむけているのが見えた」と言ったそうですが、ドアの所からは大きな花瓶に遮られて枕元の顔は見えないのです。それに五時十分ならもう室内は薄暗かったはずで、はっきりと目の表情まで見てとれるわけがありません。島村さんが故意に嘘をついたとは言いませんが、おそらく姉の下半身の手の動きだけを見て、勝手な想像を喋ったのだと思います――。

いいえ、私は病室に入るとすぐ電気を点そうとして右に寄ったので、確かに築田静子さんの目が異様に潤み、薄闇の中でも酔いしれて光っているのを認めました。手の動きに気づいたのはその後で、私は即座に病室を出ようとしたのですが、その時患者が私の存在に気づき慌てて身繕いをしたので、私は食事だけを置くで飛びだしたのです。

私がこんな重要なことで適当な嘘を喋っていると思われるので話しますが、実は先月、つまり昨年末にも私は一度、静子さんが自分の手を用いて同じ行為をしているのを、偶然、二センチほど開いていたドアから盗み見ております。顔は見えませんでした、喘ぎ声（あえ）が聞こえ、露

になった両脚の狭間に指が埋まっているのが見えました。患者にもそれぞれの生理があるのですから、見て見ぬふりをし今まで誰にも話さなかったのですが、私はやはり水商売の女性というのは性的にルーズではないかという印象をもちました。いいえ今度は、指が具体的にその部分にさしかかっているのを見たわけではありません。私は胸から腹部へと手が滑り落ちていくのを見ただけで、一瞬後には視線を外しましたから。でも私が決断していい加減な想像を喋ったのでないことは、昨年末のこと、それに私の想像と村木先生の主張が完全に一致していることからわかってもらえるはずです。たとえば彼女の主張にも真実があつて、彼女と村木先生の間に本当に肉体的な交渉があり、私の見たのがその後の光景だったとしても、私には彼女のとつていた姿が無理矢理暴力で姦おひされた人のものとは信じられません。自らの手を用いて快楽を貪つたのでなければ、彼女は先生との交渉の余韻を楽しんでいたのでしょうか、彼女の歡喜に浸つた目は、自分からすすんでその交渉を求めたか、それとも合意のうで交渉を図つたか、そのどちらかの結果だったと思えます。

嘘が最も恐ろしいのは、本人がその嘘を真実と錯覚し信じこむようになってしまうことです。築田静子に今、それが起こっています。精神鑑定を受けさせた方がいいと思いますね。私の方こそが、その嘘と狂つた神経の被害者なのです。前にも言つた通り、カーテンを閉めてくれと言つたのは彼女の方です。いつものように簡単な診察を終え、「この調子なら半月で退院できる」と励まして何気なく窓辺に立つた時でした。「内密な話があるからドアの錠をおろしてほしい」と続け様にそう言われ、変だとは思ひながらも言われた通りにしてふり返ると、彼女はいつの間にかベッドに腰かけた姿になつて、むきだしにした右脚を振り子のように揺らしていたのです。脚